

帝国主義と文化主義は相互補完

サミール・アミン著、脇浜義明訳

Monthly Review、1996年6月号 *脚注は訳注

(この論文はマンズリー・レビュー誌1996年6月号に掲載されたもの。もともとは、エジプトの『アル・アハラム・ウィークリー』の1995年12月28日号にフランス語で掲載されたもので、それをパスカル・ガザレーが英訳し、編集助手のモーナ・エイムスが編集したものである)

マンズリー・レビュー編集部

資本主義はいつも資本主義の危機、挫折、犯罪をもっともらしい弁解的説明を提供する学者や作家を歓迎して報いる。よく見られるのは、近代科学以前の偏見や迷信に近代的(あるいはポスト・モダンの)な科学的装いを凝らして提供される言説である。我々左翼の史的唯物論社会科学の対抗説として提供される言説は、閉じられ隔離された「文明」と「文化」を持ち出して、世界史的過程とする理論である。これらの閉鎖的・隔離的「文明」と「文化」を歴史によって説明するのではなく、それによって歴史を説明するやり方である。このような世界史説を唱える現代の作家はサミュエル・ハンティントン(ハーバード大学教授)で、彼は帝国主義の犯罪を文化的「性格の不一致」の産物として正当化する。現在いろいろなリズムや歌曲や不協和音という雑音が聞こえる。それらは人種論的疑似科学を少し変形させたものを起源とするのだろうが、ハンティントンの説はそういう雑音に学問的権威をつけた「欽定訳聖書」の役割を担っている。他にも少し品好く見せた様々な断片、例えば「アイデンティティ政治」とか「共同体主義」(コミュニタリアニズム)として現れる場合もある。

エジプトの雑誌『アル・アハラム』が、我々の親友でマンズリー・レビューによく寄稿してくれるサミール・アミンにハンティントンの『文明の衝突』を論評してくれと依頼した。アミンの文化主義と帝国主義が相互補完的であるという議論、帝国主義被害者が、平等と解放ではなく「異質性」を受容している現実の分析は、現在の世界でも役に立つ議論である。

訳者：

イスラエル、米国、先進資本主義諸国のガザ・ジェノサイドを宗教戦争、文化戦争、民族戦争と解説して、帝国主義の犯罪や歴史を無視する評論家がいるので、この論文を翻訳した。

主流イデオロギーは当然のこととして保守的である。あらゆる形態の社会構造は、自己を再生産するためには、歴史の終わりには自己認識しなければならない。しかし、科学的思考の第一歩は、この社会体制の自己認識像を超えるところにある。保守的な支配的言説は、近代社会を支配していると彼らが想像する種々の「価値観」をごちゃ混ぜにして放り投げるといふ低俗なやり方で力を獲得する。このごちゃ混ぜ壺に投げ込まれるのは、政治組織の原理(合法概念、国家概念、人権概念、民主主義概念)、社会的価値観(自由、平等、個人主義)、経済生活構造の原則(私的財産、「自由市場」)である。そしてこのごちゃ混ぜから、これらの価値観は同一の論理過程から一つの不可分の全体を構成するという見当外れの主張が生まれる。かくして、資本主義と民主主義が、あたかも当然の結合であるかのような主張となる。しかし、歴史はそうでないことをはっきり実証している。民主主義的進歩は人民の闘いによって勝ち取られるもので、決して資本主義の発展の自然発生的な産物ではない。

第一部

「歴史の終わり」を人類史の終わり、地球の歴史の終わりにしないためには、資本主義を乗り越えなければならない。資本主義以前の社会体制は、それぞれその歴史的ポテンシャルを使い果たすまで数千年の長い期間がかかったが、資本主義の場合は、おそらく、そんな長期間の長生きはなく、歴史的には括弧が括られるような小現象で終わるかもしれない。現時点では資本主義は蓄積段階を終え、資本主義に取って代わる社会体制、資本主義より優れ、人間疎外のない合理性に特徴づけられ、本当の地球的規模のヒューマニズムに基づく社会体制への道を開拓している段階だ。換言すると、資本主義はその肯定的歴史的ポテンシャルを早くも消耗してしまったのだ。進歩の手段(たとえ「自覚しない」手段だとしても)であるのをやめて、進歩の障害となったのだ。

ここで言う進歩とは、資本の拡大と結びつけられる抽象的で付随的産物ではなく、資本の本当の産物とは相容れない人権基準で別個に規定されるものだ。資本の本当の産物とは経済的疎外、グローバル分極化である。そういう違いがあるから、資本主義の歴史はその誕生のときから、それを否定する諸運動を伴ってきたのである。ある時期には資本の拡張の論理が一方的な力として猛威を振るい、またある時期には反体制勢力が台頭して資本の拡張がもたらす害悪を制限することがあった。

産業革命の不平等な展開、プロレタリアート化、植民地主義が見られた19世紀が資本主義拡張の第一歩であった。しかし、資本の栄光への賛美にもかかわらず、資本主義が内包する矛盾という暴力が歴史を勝ち誇った「ベル・エポック」(良き時代)と宣言できる方向へ導かず、世界大戦、社会主義革命、非植民地人民の反乱を生み出した。第一次世界大戦後のヨーロッパで勝利した自由主義が混乱をもたらし、やがてファシズムとなる幻想的で犯罪的な反応への道を開いた。

従って、資本主義が文明的な展開、つまりソビエト連邦の共産主義、社会民主主義、民族解放運動の出現で、資本主義がそれらとの歴史的妥協を通じて文明的な拡張段階へと進んだのは、やっと1945年、ファシズムの手法が完全に失敗してからであった。これらの妥協は資本主義の論理との訣別ではなく、資本主義の矛盾が爆発して生まれた運動を不承不承認めざるを得なかったための妥協であった。事実、妥協の結果、経済的疎外と分極化という資本主義の害悪は幾分弱められた。しかし、その妥協的局面はもう終わった。妥協のもとで作りに上げた福祉体制は、当然のこととして部分的で不完全な体制であったが、それは次第に崩れ、その崩壊とともに妥協の論理も崩れていった。現在の勝ち誇った自由主義の言説(ネオリベラリズム)への回帰、フクヤマの「歴史の終わり」を信仰するネオリベラルの言説は、資本主義初期の悲劇的光景の再現を意味するのか? このネオリベラリズムは記録的な速さでイデオロギー的真空地帯を作り上げ、分極化を強める諸条件をかき集めたのではないか?

このネオリベラリズム体制の被害者が抵抗するのは間違いない。すでに抵抗は始まっている。しかし、抵抗者は資本の論理に対してどのような論理を展開するのであろうか。どのような形の妥協を資本に要求するのだろうか。もっとも急進的な推論を言えば、どんな体制を資本主義に代わるものとして打ち出すのであろうか。以前なら社会主義とか新国家造りなどを掲げた大衆動員が可能であったが、いまやそれらは、資本主義のしぶとい生き残り戦略の新しい要素と闘うイデオロギーを欠くために、人々の信用を失っている。代わりに人々に訴えるテーマとして現れているのは、(通常は民族的な)共同体主義と関連付けられた民主主義(たいていは暗黙裡に一部の恵まれたグループに限定された民主主義)であり、それは「異なる権利」で正当化され、そして時々エコロジーや文化、特に宗教的独自性によって正当化されている。

第二部

文化的相違は単に現実的で重要なものであるだけでなく、根本的、恒久的、固定的で、超歴史的であるという考え方は、昔からあった。それは、いつの時代でも、人々の一般的偏見の基礎として作用した。すべての宗教はそういう形で自己規定した——歴史の終わりとして、決定的答えとして。しかし、進歩は批判的・社会的・歴史的反映(普遍主義的進歩)であり、社会科学の構築が常にこの文化的普遍論という偏見と闘ってきた。文化も宗教も常に変化し、その変化は説明可能である。ここでこの馬鹿げた世界観を歴史の現実には照らして偽りでありことを証明する労を取る必要はなく、それよりも、第一に、何故超歴史的な「文化」があるとする発想が現代に主張されるのか、そして第二に、何故それが政治的に成功するのかを、検討することの方が必要であろう。

文化的特殊性論は相違が決定的で、類似性や同一性は偶然の所産だという偏見に基づいており、説得力に乏しい。しかし、その偏見に基づいて、何事につけ企業が好む結果がアプリアリに決定される。そのとき例示される相違とは関連する考察の陳腐さを裏切るものである。ハンティントンが彼の有名な論文「文明の衝突」で書いたように、これらの相異は「人間と神、自然、権力との関係」を定義する領域に関係しているので基本的なものであるということは、文化を宗教に縮小するのまったく同じで、それぞれの文化はハンティントンがあらかじめ準備していたカテゴリーの中で彼が問題にする関係という固定観念を発展させると仮定することだ。

しかし、実際の歴史は、それらの概念は決して固定的ではなく、想像された以上に柔軟であることを示している。それらは新しい客観的状况に応じて、様々な歴史的変化に応じて、新しいイデオロギー・システムの中で、新しい形を採る。過去の中国の後進性を儒教で説明した文化主義者は現代中国の発展を同じ儒教で説明しようとする。多くの歴史研究者は10世紀のイスラム世界は単に華々しかなかっただけでなく、当時のキリスト教ヨーロッパより進歩

の可能性があったと感じていた。しかし、その後の歴史で、キリスト教ヨーロッパが進歩的で、イスラム世界が後進的と説明されるようになったのは何故か？ 宗教（もっと正確に言えば、社会によって解釈された宗教）か、それとも宗教以外のものか、あるいは両方か？ キリスト教世界とイスラム教世界という二つの現実の交互作用はどういうものだったのか？ どちらが文明化の原動力だったのか？¹ こういう具体的で現実的な問題に関しては、ハンティントンより過激な文化主義者はまったく無関心で、ハンティントンの言説は非科学的で、粗雑である。

さらに、「文化」というが、どういう文化なのか？ 宗教で規定される文化なのか、使用言語で規定される文化なのか、「民族 (nation)」で規定される文化なのか、政治体制で規定される文化なのか？ ハンティントンはどうやら宗教を基準にしているようで、宗教に基づいて文化を7グループに分類している。1) 西洋 (カトリックとプロテスタント)、2) ムスリム、3) 儒教 (儒教は宗教ではないのに!)、4) 日本宗教 (神道それとも儒教?)、5) ヒンズー教、6) 仏教、7) ギリシャ正教。彼はこの7つで今日の主要な文化的区分を説明できるとした。彼には日本文化を他の儒教文化と区別し、ギリシャ正教を西洋キリスト教文化と区別する必要があった理由は、容易に読み取れる。(これは、ハンティントンとが公然と親しくしている米国務省の戦略の反映であろう。ギリシャ正教のロシアがヨーロッパの一部と扱われるのは、彼にとって悪夢だったのだろう) また、彼がアフリカ文化を無視しているのはあきらかである。アフリカ人は、キリスト教徒、ムスリム、アニミズムであろうと、それぞれ独自の文化をもっている。(彼のアフリカ無視はアフリカに関して無知であるか、低俗な人種的偏見のためであるかもしれない) また、ラテンアメリカも無視している。ラテンアメリカの人々はキリスト教徒なので、西洋グループと同じではないのか？ もし、そうなら、何故ラテンアメリカは西洋より低開発なのか？ ハンティントンの三流のヨーロッパ中心主義のバカバカしさは、このようにいくらでも指摘できる。

ハンティントンは苦心して作った7分類をくどくど説明するうちに、7グループのうち6グループが西洋の価値観にまったく無知であるという驚くべき発見をした。その西洋価値観には、手品で作り出したような特徴的な概念の結合がある——資本主義（「市場」）と民主主義（歴史的事実を無視して、アприオリに資本主義と結びつける）との結合である。しかし、ラテンアメリカよりも市場経済が発達した日本は非西洋ではないか？ そもそも西洋においても、市場と民主主義は最近になって生じた現象ではないのか？ 中世キリスト教は自己を歴史を超越した「西洋的」価値観と認めていたのではないか？

イデオロギー、とりわけ宗教的イデオロギーが大切であるのは言うまでもない。しかし、人類がイデオロギーを社会的に位置づけて、同じような歴史的条件のもとでは、異なった社会でも、機能的に類似したイデオロギーが生まれることを発見して、もう200年になる。宗教的イデオロギーの社会的機能も、それぞれの宗教の特殊性を超えて、ほぼ同じである。こういう見方のなかでは、伝統的「文化空間」の多様性と相違が消失したわけではない。消失とは程遠い状況だ。しかし、近代資本主義（ハンティントンはこれを間違って「西洋文化」と呼んだ）のもとでは、それらは内側からも外側からも変形した。私は、この資本主義の文化（西洋文化ではない）が世界的に支配力を持ち、古い文化の中身を空にしたと観察している。資本主義が発達したところでは、資本主義の文化が内部的に古い文化と取って代わった。例えばヨーロッパと北アメリカでは中世キリスト教文化と資本主義文化とが入れ替わった。それと同じように日本では従来の儒教文化が資本主義文化に取って代わられた。その一方で、資本主義周辺部では、資本主義文化が伝統的旧文化を十分に变化させることができなかった。この違いは古い文化の特殊性に関連するものでなく、中心部と周辺部の資本主義発展の差と切り離して考えることはできない。

資本主義の世界的拡大の中で、その普遍主義的主張とそれが物質的実体として生み出す分極化という矛盾が明らかになった。中身はほとんど空洞化されているが、普遍主義の名のもとに資本主義が提供する価値観（個人尊重、民主主義、自由、平等、世俗主義、法の支配等々）は資本主義システムの被害者にとっては嘘、せいぜい「西側文化」にだけ適用される価値観に見えた。この矛盾が一時的な偶然の所産ではなく、恒久的なものであるのは明白で、グローバリゼーションの深化の各段階（我々が現在体験している段階も含めて）でその暴力性があらわになる。そこで資本主義システムは、資本主義特有のプラグマティズムのおかげで、その矛盾を管理する方法を発見する。つまり、各社会は「文化の違い」を受け入れ、被抑圧者は民主主義、個人の自由、平等などの要求をやめ、多くの場合それらとは反対の、自分たちだけに適用される価値観を受け入れることである。このご都合主義的なモデルは、

¹ ヨーロッパ文明はイスラム文明から学んで発展した。古代ギリシャ文化はイスラム文化を通じてヨーロッパに伝わった。

資本主義の被害者に自分たちの従属的位置を内面化させ、資本主義拡大が必然的に生み出す分極化強化への抵抗をないようにするのだ。

このように、帝国主義と文化主義はベッドを共にする仲良しである。前者は「西洋」は歴史の終わりに達したと傲慢な宣言をし、経済運営（私有財産や市場）、政治生活（民主主義）、社会（個人の自由）の運営の常とう手段がア prioriに相互接続し、決定的で、最良のものだと言う。現実にある矛盾は単なる想像の所産、あるいは資本主義の合理性に従うことを拒否するバカ者どもが勝手に吹聴しているだけであるとする。西洋以外の人々の選択は簡単で、「西洋の価値観」への偽りの統合を受け入れるか、それが嫌なら自分たちの文化的特殊性に中に閉じ込められるかのどちらかである。しかし、「市場」と帝国主義が必然的に作り出す分極化のために、前者の選択は不可能である（世界にほとんどに国にとってそうである）。そうすると文化的対立が前面化する。しかし、この対立ではサイコロが細工されている：「西洋」がいつでも勝ち、非西洋が負けるように仕組まれた対立である。非西洋の資本主義国の「西洋の価値観」選択が認可され、奨励されるのだ。脅威を受けるのは被害者だけである。こういう状況、「歴史の終わり」とか「文明の衝突」という神話的な言説が支配的な状況に対して、批判的研究は本当の問題を追求する。資本主義は自分が生み出す矛盾を自らの論理では克服できない。資本主義は歴史の中の一段階にすぎず、それが主張する価値観には歴史の実在性がなく、資本主義自体がその価値観を制限し、価値観と矛盾する現象を引き起こし、価値観を空洞化する。

「西洋」の自己満足の言説はこれらの問題に対応しない。意図的に問題を無視する。「西洋」支配の被害者の文化主義者の言説は資本主義の矛盾が生み出す被害者の存在を迂回し、対立や紛争を本当の問題の外へと移行させ、文化という想像空間へ逃げ込む。例えば、資本主義システムのヒエラルキー構造の中でイスラム世界をバザール（市場）の仲買人として位置づけているが、その位置で社会をしっかりと管理・支配してくれさえすれば、何ら問題はない。過去のファシズムと同じように、現代の文化主義も嘘をばら蒔いて活動する。危機の解決を装いながら、実際には危機を管理あるいは隠蔽するのだ。しかし、過去を振り返るのでなく、将来に目を向けることが意味するのは、本当の問題、本当の危機に取り組むことだ。いかにして経済的疎外、浪費、グローバル分極化と闘うか、歴史の一段階としての資本主義が並びたてた偽りの価値観を超えて、本当の普遍的価値を実現させる条件をいかにして作り出すかという問題と取り組むことである。

同時に、文化遺産の批判も必要だろう。ヨーロッパの近代化はヨーロッパ人が自分たちの過去と宗教を批判しなかったならば成立しなかったであろう。同じように、中国の近代化も過去、特に儒教イデオロギー（毛沢東主義はそれを取り入れたが）の批判がなければ成立しなかったのではないかと。確かに、後になって遺産（キリスト教及び儒教）が新しい文化の中に統合されたけれど、それは過去の根本的な批判によって遺産が根本的に変革されてからであった。ところが、イスラム世界においては、過去にこだわり、過去を批判することを頑迷に拒否したために、資本主義世界システムのヒエラルキーの中でこの文化空間にこだわって、絶えず取り残されていったのである。

第三部

人は、ある状況を分析した後は将来の発展の可能性を検討するのが普通である。戦後資本主義発展が依拠した労使協調路線が次第に崩れ、ネオリベリズムという新局面に突入した。資本は規制から自由になり、金銭的利益の追求という自らの一方的論理に従って、世界支配という理想郷を構築しようとした。最初に実現したのは列強の戦略の二つの目的、つまり経済的グローバリゼーションの深化と、列強に抵抗する勢力の政治的力の破壊である。

世界を市場のように扱おうと必然的に政治勢力がバラバラに断片化する。換言すれば、国家の力（反国家イデオロギーが正当化する目的）が事実上破壊され、代わって「コミュニティ」（民族的あるいは宗教的）や宗教的原理主義のような原始的イデオロギーによる連帯集団が優先される。世界支配については、米国が唯一のグローバルな警察となり、それ以外の国に世界の警察の真似をさせない（米国とは別個に独立した軍事力を持つ国家にさせない）。他の国々は日常的な市場管理というささやかな仕事だけをやっておればよい。EU プロジェクトも市場の共同管理というふうに見做され、それ以上のものではない。EUの境界線を超えると、バラバラの断片化が促進される（出来るだけ多くのスロベニア、マケドニア、チェチェンが作られる）。「民主主義」や「人権」が動員されて、「民主主義」や「人権」の名のもとで操作された人々が民主主義と人権を使う能力を破壊する状態を作り出す。特殊性や違いの賛美、民族的あるいは文化主義的目的によるイデオロギー的動員が無力な共同体主義の原動力となり、彼らの闘いを民族浄化の場に変えるか、あるいは宗教的全体主義にしてしまう。

こういう論理的枠組みで「文明の衝突」が作られ、望ましいものとされる。私はハンティントンのアプローチをこのように読み解く。同じような枠組みで、過去において彼は「開発」の名のもとで第三世界の独裁主義支持を正当化するテキストを書いたことがある。今度は「文化の不一致」をめぐって紛争が多極化し、その危機管理で使われる手段を正当化するテキストを書いた。これは、私が何度も指摘したように、「西洋」の勝利を保証する紛争の場を構築する戦略に他ならない。

短期的には、民族的及び宗教的紛争の増大を受けて、この戦略が有効であるかのように見える。しかし、本当に「自然な」文化紛争があるのだろうか？ 私はそれに対し強い疑問を何度も表明した。「特殊性」の暴力的主張が人民の自然な産物であったことはほとんどない。それは、たいていの場合、権力を持つ少数者、あるいは指導者になりたがっている少数者が作り出したものだ。また、資本主義システムのグローバル展開が生み出す矛盾で危機を迎える支配階級が、この文化主義や民族主義的戦略を頼りとして利用することも、明らかである。これは、めったにない大変動に見舞われた東欧諸国で見られる現象である。また、競争力のある産業生産者リストから抹消されて、資本主義世界システムの中で周辺化されたイスラム世界とサハラ以南アフリカでも見られる。そこで見られるネガティブな民族主義は、資本家の危機管理視点から見れば、利用し易い下級役人みみたいなものである。ハンティントンが下級役人を務めている米国の対外政策も諜報機関も、資本の拡大に対して抵抗した（戦後の労使協調的妥協枠組みが崩れる中で）大衆運動に関しては、「違い」とか「文化的不一致」という論理を使うことにしっばいしたことはなかった。第三世界の運動に関しては、例えばアンゴラのサヴィンビ、アフガニスタンのヘクマティアル、ユーゴスラビア（クロアチア）のトゥジマンのような反乱指導者を援助したことは、現在の最も醜悪な「文化紛争」が決して「自然なもの」でないことを表している。地方文化は、いくら特殊性があり、支配的な資本主義文化や資本主義世界システムと関係があっても、それ自体では文化主義者が主張するような一般理論を引き出すには不十分である。地域の違いを説明できるキーは文化の外で探さなければならない。体系的な文化の衝突なんかはない。あるのは基本的に別な性格の衝突で、その中に文化的側面が含まれるだけだ。従って、大衆闘争戦略を規定するためには、文化ではなく、資本主義の矛盾、我々が生活している特定の歴史的瞬間に採るその矛盾の形態の分析から始めなければならない。

サミール・アミンについて

サミール・アミン (1931-2018) は、世界で最も偉大な急進的思想家の一人。エジプトに生まれ、1980年から亡くなるまでダカールの第三世界フォーラムのディレクターを務めた。彼は、『Monthly Review』や『Monthly Review Press』に、『Accumulation on a World Scale: A Critique of the Theory of Underdevelopment』 (1974年)、『The Law of Worldwide Value』 (2010年)、『Samir Amin: Memoirs of an Independent Marxist』 (2018年) など、数多くの記事や書籍を執筆している。